

第8回 京都建築賞 結果発表

主催 一般社団法人 京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

建

京都建築賞は、京都府建築士会の創立60周年を記念して創設されました。京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とするものです。第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門「藤井厚二賞」を創設しました。藤井厚二賞については2月号（予定）で紹介します。

最優秀賞

京都市美術館

設計者 青木 淳（株式会社AS）

西澤徹夫（西澤徹夫建築事務所）

森本貞一（株式会社松村組）

久保 岳・中山 至・西田典弘・鳥居久人（株式会社昭和設計）

優秀賞

深草の工房住宅

設計者 高橋 勝（高橋勝建築設計事務所 一級建築士事務所）

奨励賞

HOSOO FLAGSHIP STORE

設計者 細尾直久（HOSOO architecture）

高古輝樹（TT Architects 株式会社）

〔審査委員会〕

委員長 竹山 聖（株式会社設計組織アモルフ代表取締役）

委員 井上章一（国際日本文化研究センター 所長）

永山祐子（有限会社 永山祐子建築設計）

古代象形絵文字作家 竹本大亀氏
プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。漢字のルーツが絵文字であることに注目。

現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

2020年 京都建築賞 審査総評

審査委員長 竹山 聖

新型コロナウイルスの広がりによって社会も私たちの意識も大きく変化している2020年、京都建築賞の審査も当初の予定より延期され、授賞の方法も模索されつつある。とはいえ、やはり建築は現地を見なければわからない。今回もいくつかの建物を実際に訪れ、対面しての審査を行うこととした。面と向かってフランクに話し合うことによって、審査員それぞれの評価のニュアンスも感じあうことができる。パツクグラウンドや視点の異なる審査員には各人なりの独自かつ独特の評価基準がある。

現地審査は淡々で行われ、議論は審査会場に戻ってから。前回の審査は遠方までバスで足を伸ばしたから、帰路、ざつぐばらんな予備的議論もあったが、今回は審査会場で、さていざ、と議論がはじまった。すると、驚くべきことに、3名の審査員の意見がはじめからまったく一致していたのである。

最優秀作の△京都市美術館Vは、困難な課題を解きつつ、決して思わせぶりなデザインでなく、品良く、空間の質を高めていることに感銘を受けた。

コンペ当選案を見たとき、その正面玄関地下への地形を傾斜させたアプローチに、

これは思いもよらなかった、と脱帽したもののだが、実現した空間を見て、そのさりげなさにさらに感動した。エントランスというとい劇的な演出を考えがちだが、天井も低く抑え、かつての構造体や装飾を生かし、しかもそれが一向にわざとらしくない、心地よいスケールの空間になっていた。

各空間相互の連結やスケールやシークエンスの変化、動線の妙も、美術館体験の驚きと喜びを倍加させてくれる。建築空間としては全体に抑えた表現だ。むしろそこを訪れる他者を、あるいはすでにある他者を、さらにはかつてあった他者を生かす気持ちが行き届いていることがことのほか好ましく感じられた理由なのかもしれない。これは審査員全員に共有された思いであったと思う。

優秀作の△深草の工房住宅Vもまた、さりげない佇まいの佳品である。そして同じく他者を、つまり周囲の環境、風景、そして崖崩れの危険などをも受け入れ、ともに生き、生かす工夫が各所に凝らされている、とも感じた。

建築が自己完結してそれ自体の美を歌うのも潔い態度だが、幸か不幸かこの住宅も、京都市美術館も、すでに既存の強固な、そ

して特異なコンテクストがあって、つまり他者があって、それに対してあらたな価値をその関係の中から見つけ出そうというアプローチをとっていた。いや、とらざるをえなかった、というべきか。だからこそ、とても説得力のある建築になった、といえるのではないだろうか。

奨励作の△HOSOO FLAGSHIP STOREVは、そうした意味では逆に、あえて周囲とは縁を切り、屹立した別世界を作り出す試みだといっているだろう。

京都の街中にあるから周辺環境のスケールや色合いを考慮しつつも、周囲とは一線を画した緊張感のある内部空間を形成する姿勢を貫いている。この閉鎖的な空間の扱いは、近年の流行りである開かれた空間とは正反対であって、一見暗く閉ざされた印象を与えるが、しばしその空間に身を置くなら、西陣織の伝統的な技術を現代に生かし、さらに新しい技術を加え、ジャンルをも広げていく拠点として有効な解決だといえることがわかる。京都はそもそも、さほど開いた空間を志向する街でも人々でもない。むしろ秘めやかで隠微なニュアンスを尊ぶ。これ見よがしに看板を掲げたり、中身をさらしたりするのは野暮なふるまいだ。ただ

少しばかり、ほんの気配だけでも外から見せてやってもよかったかもしれない。

選にはもれたが、△京都松竹阪井座ビルVは、新京極という特徴的なアーケード街の街角に新たな風景を作り出して、さわやかな建築であると感じた。こちらはむしろ街に開く透明な店舗を一階に配して、二階から上をホテルとしているが、そちらも周囲に開いて、不思議な景色が楽しめるラウンジが生み出されている。新京極は商店街であるから開くのは常套手段だが、それでもその透明感は清々しい。かつてこの界限には特徴的な映画館があって、繁華街らしいいかかわしさを醸し出していたから、それがなくなつて建ったこの建築のさわやかさはなお印象的だ。

審査のプロセスで交わされる審査員同士の議論は楽しく、絶妙のメンバー構成に思える。審査を取りまとめる立場にある者として、その歯に衣着せぬ意見の数々に耳を傾けるのは大きな喜びであり学びであり、心から感謝するところだ。

設計者：青木 淳／(株)AS 西澤徹夫／西澤徹夫建築事務所 森本貞一／(株)松村組
久保 岳・中山 至・西田典弘・鳥居久人／(株)昭和設計



【講評】

琵琶湖疎水に面し、岡崎公園、ロームシアター、京都府立図書館、京都国立近代美術館、京都市動物園等、京都の中でも最も文化施設の立ち並ぶ特殊なエリアの中、前面の神宮道から望む京都市美術館は80年前の創館当時のままの姿で佇んでいた。近づいていくとすり鉢状にえぐられた広場の中央に向けてさがっていくスロープにより、自然に既存エントランスの地下部分にあたる新規エントランスへといざなわれる。帝冠様式の荘厳な佇まいはそのままに曲面ガラスに覆われた増築部分が霜柱のように建物全体を支えている。現代においてはやや格式ばったようにも感じる旧エントランスから現代的なアプローチへ変換され、日本最古の公立美術館の体験ストーリーは導入から書き換えられている。

エントランスを入ると左右にカフェとミュージアムショップ、そしてその昔、下足室であったエントランスホールへつながる。奥の階段を登っていくと頭上に最もダイナミックな中央ホールが広がり、その奥の日本庭園、東山へと抜ける、地下から地上に抜ける高低差を活かした体験的な軸線が現れる。そして中央ホールの左右の暗い展示室を抜けると、昔機械置き場となっていた中庭スペースが光の降り注ぐダイナミックな展示室となって現れる。この新しい展示室の存在によって既存の隣接する展示室はその前室であるかのように体験のストーリーがここでも大きく変化する。中央ホール2階は左右の暗い展示室を抜けると、昔機械置き場となっていた中庭スペースが光の降り注ぐダイナミックな展示室となって現れる。この新しい展示室の存在によって既存の隣接する展示室はその前室であるかのように体験のストーリーがここでも大きく変化する。中央ホール2階は左右に新しく新設されたバルコニーによって新しい動線が



所在地／京都市左京区
用 途／美術館
竣 工／2019年10月
敷地面積／25,383.71㎡
建築面積／8,205.67㎡（再整備工事対象外として別途、276.74㎡）
延床面積／18,737.92㎡（再整備工事対象外として別途、757.25㎡）
構造規模／本館：鉄筋コンクリート造
一部 鉄骨鉄筋コンクリート造 鉄骨造
新館：鉄骨造 一部 鉄筋コンクリート造
地上2階地下1階建て

写真撮影／来田 猛 (TAKERU KOREDA)

生まれ、2階の回遊性があがっている。収蔵棟であった新館は現代アートなど新しい表現の作品に柔軟に対応する場所となっている。既存部分が丁寧に活かされながら、すり鉢広場、地下から支える増築部、新しい地下エントランス、中庭展示室など重要な部分に仕掛けられた布石によって周囲の既存のストーリーがオセロのように鮮やかにひっくり返され、魅力的な新しい面が現れている。歴史ある建築の保存的改修、物質的なリノベーションではなく、80年の物語の細やかな再構築によって作られた美術館は、未来に向けてさらに新しい物語が加わる余地を与えている。なぜ、今までこういう改修がなかったのだろうと拍子抜けするほどの自然で無駄のない所作で蘇った京都市美術館は紛れもない名作である。

(永山祐子)





設計者：高橋 勝／高橋勝建築設計事務所 一級建築士事務所



所在地／京都市伏見区
用途／住宅
竣工／2019年3月
敷地面積／185.22㎡
建築面積／49.34㎡
延床面積／108.81㎡
構造規模／木造2階建て

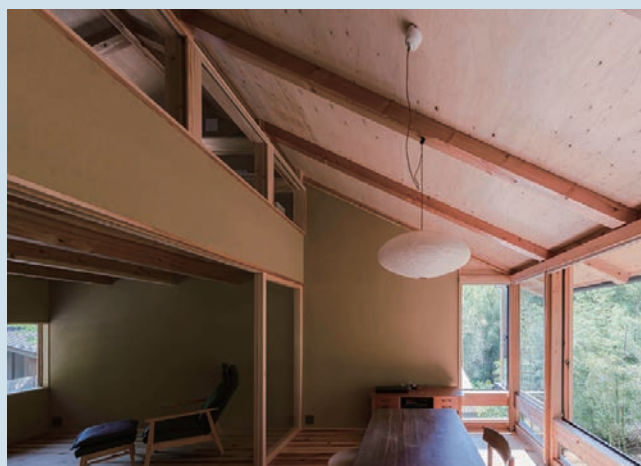
【講評】

なんと言っても、敷地がいい。北側には、竹林がある。しかも、そこは竹林として利用されてきた。これからは、そうありつつあることになっている。とうぶん、何もたない。そんな土地が、眼前にひろがっている。

この北側へむかい、大きく窓をあける。そうすれば、竹林の光景は当家のものとなる。竹林の管理者は、べつにいる。しかし、そのヴィジュアルは、もっぱら当家の住み手をたのしませる。圧倒的な借景となる。

さらに、その西側は御陵林となっている。宅地として開発されることは、まずない。西側でも、とうぶん緑がたもたれる。開口部からは、こちらまたのしめよう。

おまけに、ここは都心からそうはなれてもいない。数百メートルほど歩けば、私鉄の駅舎もある。ひじょうに便利な場所である。その都市近郊にあつて、これだけの緑を確保する。すばらしい土地を見つけたものだと思う。まずは、その発見に喝采をおくりたい。まあ、ここを見出したのは施主たちだが。



ただ、敷地の東側には、こまつたところもある。真横に山裾の崖がせまっている。土砂崩れの不安はぬぐえない。ハザード・マップでも、警戒がうながされている。いわゆる土砂災害特別警戒区域にくみこまれてきた。覚悟のいる土地である。

しかし、値段は安い。たいていの人が敬遠する土地である。不動産業者も、ここには多くをもとめない。居住の決断さえつければ、たやすく手にはいる。じじつ、施主たちは購入にふみきつた。緑を満喫する。竹林の朝焼けや月夜を堪能する。この住環境は、災害の可能性もひきうけたうえで獲得された。

土砂崩れの恐れを、できるかぎり解消する。もちろん、建築家もそのことに力をつくしている。また、法規がもとめる擁壁も、ととのえた。のみならず、その壁を防音用にもいかしている。ハンデを逆手にとって、活用する。そんなしたたかさも、もちあわせていたと言えべきか。

とはいえ、究極の立地である。建築家にできることは、かざられる。この条件をあたえられれば、誰もが同じように対応するだろう。似たような解答を呈示すると思う。当家の設計も、そんな解答の一例であつたと、みとめてよい。もちろん、しつらいのひとつひとつには、それなりの工夫もあるのだ。

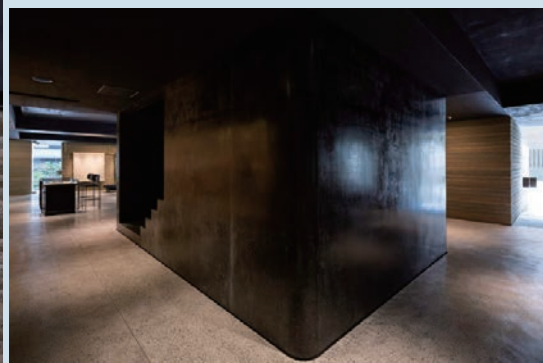
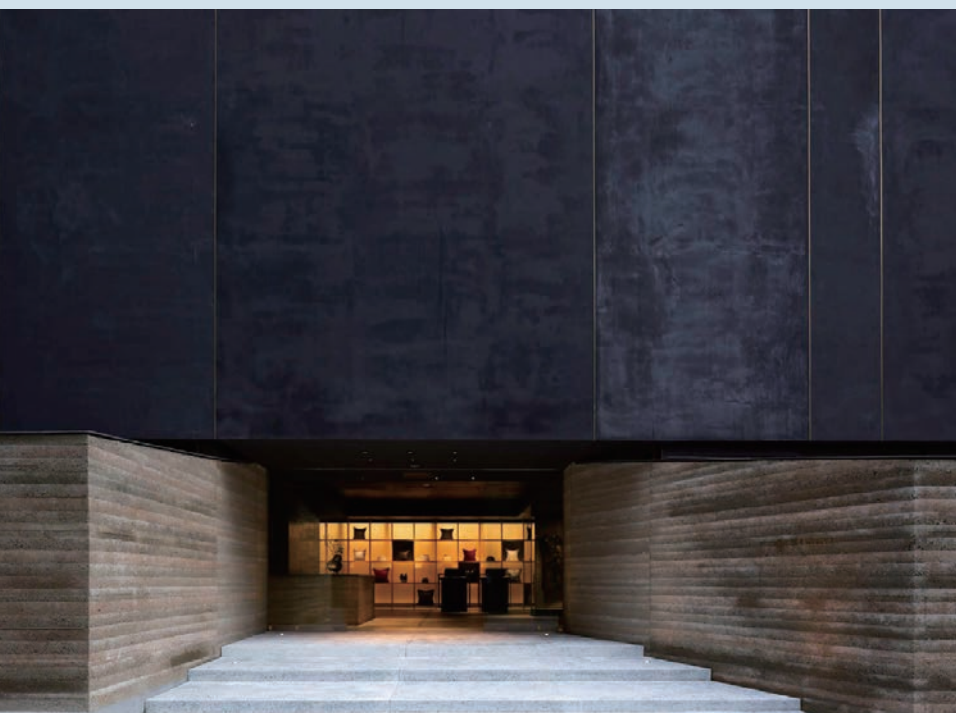
建築家にとりうる選択肢は、あまりない。今、うっかりそう書いた。しかし、いわゆる商品化住宅では、この条件に対処しきれない。ハウスメーカーには手も足もでない立地である。やはり、ここは建築家の出番となる。腕のたつ建築家でない、のりきれない。そして、当家の建築家はその腕前を、十分に発揮したと思う。

そう考えるいっぽうで、かみしめる。いい住宅作品は、住み手のふんぎりがないととなりたない。ハザード・マップの危険信号も、うけいれる。この緑をあじわうためなら、少々不安はいとわれない。そう腰のすわった施主がいなければ、こういう作品は出現しないと痛感した。

すばらしい施主との出会いにも、拍手をおくりたい。

(井上章二)

設計者：細尾直久／HOSOO architecture 高吉輝樹／TT Architects (株)



所在地／京都市中京区
用途／物品販売業を営む
店舗、事務所
竣工／2018年8月
敷地面積／ 839.65㎡
建築面積／ 457.99㎡
延床面積／ 2,187.85㎡
構造規模／鉄筋コンクリート造
5階建て

写真撮影／藤塚光政

【講評】
西陣織の技術を使った新しい事業展開を展示販売する場所として築50年以上経つ本社ビルの改装プロジェクト。目に入るの美しい3色の土を交互に積み重ねていった版築、その上に金のラインがリズムを刻む漆黒の壁面である。外の版築塀が内側に回り込んでいるエントランスから垣間見える以外、中の様子は外からではわからない。中に入ると外からの閉じられた印象と違い、交互に配置された版築壁の向こう側から明るい光が差し込んでいて開放感がある。この壁の向こう側には奥行き2m程度の小さな部屋があり、それぞれの部屋の先に版築塀に囲まれた坪庭がある。内側の空間、構造壁、薄皮空間、中庭という内側から外部までのグラデーション的な空間の中に多様な空間が生まれている。日本建築の空間構成に見られる、内側の部屋、建具、縁側、庭の構成を現代的に作り替えているように見える。

そしてそこに生まれる陰影のグラデーションを強化しているのが各マテリアルである。版築、黒漆喰、洗い出しの床、所々に差し込まれるキラリと光る金。西陣織の中に生まれている幾重にも重なる陰影をそのまま建築にしたようである。西陣織は20以上の分業工程をそれぞれの専門の職人さんの協業により出来上がるという。今回のプロジェクトが出来上がるまでの工程も意識的に様々な職人さんの協業によって作られており、丁寧なものでつくりの精神がプロジェクトの隅々まで行き渡っているのが感じられ、まさに西陣織を伝える建築として説得力を持っている。

(永山祐子)

表彰式



長坂 大 審査委員 高田光雄 会長 竹山 聖 審査委員長

[優秀賞]
高橋 勝 氏[藤井厚二賞]
山根健太郎 氏[最優秀賞]
(代理)川口伸太郎 氏[奨励賞]
細尾直久 氏

第8回京都建築賞の表彰式を新型コロナウイルス感染症予防のため規模を大幅に縮小して2020(令和2)年11月24日、本会会議室にて執り行いました。表彰状並びに賞牌の授与の後、竹山聖審査委員長から京都建築賞部門の、長坂大委員からは藤井厚二賞部門の講評をいただきました。

従来、表彰式に引き続いて行っていた受賞作品のプレゼンテーションは、別途オンラインにて実施する予定です。詳しくは本会ホームページの京都建築賞特別サイトにてお知らせします。

第8回 京都建築賞

藤井厚二賞 結果発表

主催 一般社団法人 京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

籙

藤井厚二賞

中宇治 yorin

設計者 山根健太郎・武田憲人・山田央彦（一級建築士事務所 expo）

現地審査選出作品

深草の工房住宅

設計者 高橋 勝（高橋勝建築設計事務所 一級建築士事務所）

西院の家

設計者 中川幸嗣（一級建築士事務所 中川幸嗣建築設計事務所）

金閣原谷会館

設計者 木村日出夫・木村淳子（STUDIO RAKKORA ARCHITECTS）

〔審査委員〕

垣内光司（一級建築士事務所 八百光設計部）

長坂 大（京都工芸繊維大学 教授）

平塚 桂（ぼむ企画 編集・ライター）

藤井厚二賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。

今回は、「愉快な環境」をテーマに掲げ募集しました。11作品の応募があり、昨年の3月10日の書類審査により現地審査対象に4作品を選出。新型コロナウイルス感染拡大が懸念される中、8月5日に現地審査を行い、議論の結果、今回の藤井厚二賞には一番「愉快な環境」に相応しい『中宇治 yorin』が選出されました。

審査経過と受賞作品について2回に分けて掲載します。

律

2020年 藤井厚二賞 講評(審査経過)

[中宇治 yorin]

【平塚】 あまり人通りがなかったエリアに、集客の場所として中宇治 yorin をつくり、その動きが周りに波及して、自発的に新しいお店ができています。中宇治のまちづくりを発展させたいというクライアントの狙いが面的に実現されている点が凄く良いと思う。

【垣内】 藤井厚二賞として何を評価するのか？ yorin の良さは「所作」だと思う。建築そのものの強さというよりもクライアントの特殊性、平等院やから空き家を売っても良いというモデルが面白い。ただ、それを建築として評価するのかどうかというのは考えたいところではある。

【長坂】 平等院の件は京都ではよくある話。京都では、変な人に売ると周りから「人のつながりを壊すような売り方で儲けたのか？」と言われ、生活する上で気持ち悪いから金を出す人がいても変な人には売らない。歴史があるまちではどこも同じで、イタリアでも似たような話を聞いたことがある。まちづくりの話に連なっていくと、そういう事も含めてリフォームやなんかの建築行為と、不動産的行為と所有活動という話が動いている、その一例だと理解する。

建築という事で言うと、一期の中庭部分を内面化するというアイデアは上手くできている。また、第二期で通り沿いの既存の塀とトイレと縁側の中途半端な部分を取り除いて、スケール感を活かしてあの松の木を残して、あれを通りの両側に実現したと

いうのは、スケールを分かっているから。

【平塚】 ちょっとした溜まりみたいな場をつくるのが上手。

【長坂】 オーナーのパワー、不動産屋のパワーは勿論ある、売買のネットワークの話もあるけれど、最後にちゃんとまとめるというの、地味ではあるのだけれど、あんまり頑張りすぎないで「まあ、まあ、これくらいいいんじゃないの」というところの目の付け所は間違いない。そこは評価しても良いと思う。

【垣内】 ただ、塀を取る事で路地やたまり場を形成するという事を分かっている設計者が、裏のいわゆる良い環境、畑みたいなのところに単純に塀だけ立てて隠しましたというのはどうか。通りを挟むたまり場は誰もが認めると思う。ああいう成功体験がある一方で、裏は結構あつさり済んでるなというのはい寸気になる。あそこで一工夫あれば、あそこの読み解きだけで彼らのやってきたことは間違いじゃないと、デザイン的にも良く伝わったと思う。あそこだけですかね、僕が惜しいと思ったところは。あとは、成り立ちも面白いし、お施主さんの話も。それを周りが成功体験として認めて同じようなアクションを取っているというのは、一建築だけに留まらないまち全体の話につながる・・・。

【長坂】 それが凄いなと思う。そんなに凄いことをやっていないと言っている割に、波及効果があれだけ出ている。

【平塚】 面積的にも小さくて、第一期の段階では4つしかテナントがない小規模施設ですものね。

【垣内】 一方、そういう言いかたで、凄く楽なんですよ、こちら側としては。褒めやすいじゃないですか。そのあたりが藤井厚二賞としてどうなのかな？ 良いのは分かっているんですけど、褒めやすいけど・・・。

それと基本的にインテリアを語られたらつまらないなと思ってたんです。長坂さんが言われたように矩刈配のようなことじゃなく、何て言うのかな、空間の、場所場所のどこを通すか、何処を抜けるかというのは意味があると思うんですけど、それに対して木の板が嵌っていてどうこうといったインテリアの話をしだすと、つまらないなと思う。そこまでに至る彼らの所作というか、まちの関わり方が面白い。デザインの的に何が優れているとかと言うのは僕にはちょっとわからない。

そうすると、褒めるの楽なんです。まちに対して開かれているとか、まちが活性化されているとかという言いかたができるのと、褒め方として非常に楽なんです。・・・それ以上に、褒める言葉を紡ぐのが、僕らの仕事やと思うんですけど。

【長坂】 あの建物の場合、そういう意味でインテリアを強く褒める理由が無いという事じゃないかな。インテリアを褒めるのがつまらないという言いかたにもなったけれ

ども、素材もインテリアの話でしょ、言ってみれば。強い素材がある中庭を新しい物に変えていたり、既存の町家と工場との対比が中の壁素材の話になっていけば、より評価すべきでしょうね。そういう事は確かにそれほど強くは無かったですね。許容できるレベルに抑えたというところは評価できるけど、強い何かを提案したという事では無い。

【平塚】 でも、表現が強くないところが逆に何か良い影響力を持っている気がしたんですよ。

【長坂】 ある意味それが現代的な感じがしますよね。

【平塚】 テナントの美容室はセルフビルドで内装を仕上げていたんですけど、それが全然違和感を生んでいなかった。DIYと手法や目線が近い設計であることが、普遍性みたいなものにつながっているのかなという気がした。

【長坂】 僕もその辺は評価したいと思っている。設計者がわざと素朴な状態で作っておいてあげると、使用者も作り易いけど、ハイレベルな職人技だけでまとめてしまうと、使用者が非常にやりにくいということになる。コスト戦略も含めて、DIYを許容する範囲を巧みに設定し、それが上手くまわっている。

(3月号に続く)

設計者：山根健太郎・武田憲人・山田央彦／一級建築士事務所 expo



撮影／expo



撮影／平野 愛

撮影／expo

第8回 京都建築賞



撮影／平野 愛



撮影／平野 愛

所在地／宇治市

用 途／第一期：物販、レストラン、美容室、
ギャラリー・フリースペース

第二期：レストラン、物販、オフィス

竣 工／2018年10月

敷地面積／第一期 188.16m² 第二期 135.56m²

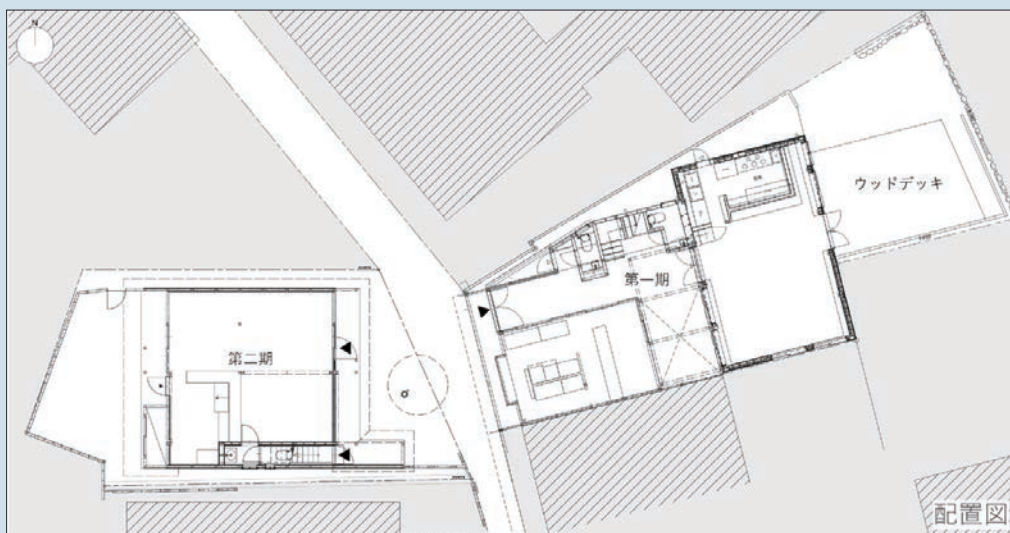
建築面積／第一期 105.97m² 第二期 65.81m²

延床面積／第一期 197.82m² 第二期 93.16m²

構造規模／木造2階建て、鉄骨造2階建て



撮影／expo



配置図



所在地／京都市伏見区
用途／住宅
竣工／2019年3月
敷地面積／185.22㎡
建築面積／49.34㎡
延床面積／108.81㎡
構造規模／木造2階建て

- 【長坂】 場所の選定も良いし、プランニングの構成も筋が通っていて全般的にはよくできているが、あの場所の活かし方としては、もう少しずつ何か欲しいなという感じが残る。がけ崩れに配慮した擁壁が非常に強い防護壁として作られている事をどう活かすか？それと、その上の部分との組み合わせが一番気になった。2階の北側の部分に開口を設けない理由が、山の中を歩く道の存在ということだが、あの立地を選んでおきながらそれはないだろう。京都の東山のすそ野にある寺の借景の庭というのは、山すそが良いからその場所にある訳です。がけ崩れについては、一寸距離をおいたり何か擁壁を作ったりしながら、場合によっては擁壁も庭の背景に使っている。斜面との付き合い方があるんですけど、この住宅の場合はどうだろう？ 東側をもう少し活かしてくれたらなと。
- 【垣内】 住宅としてはすごくよくできていると思う。完成度も高いし、なかなか立ち姿も良いし・・・でもあの擁壁が気になる、新しくできた擁壁。ああいう立面をよしとしている事が無茶苦茶気になる。
- 【長坂】 たとえばね、設計者の感覚で言うところ、山の擁壁の上はガラス面であって欲しかった。崖崩れに備えてコンクリートをもう少し嵩上げしてもいいからスカッと無理やりにも開ける。例えば欄間にしておけば、緑が全部自分のものですね。それと、こっちの竹林との二面セットで画策していれば、あそこを買ったという事がもろに生きるのだけれども、一番にテーマとすべき負の遺産がプラスになるためには、そこを対比的に何かフィジカルに扱ってくれないと弱い。何かプラス部分が一寸足りない。
- 【垣内】 確かにね、そこが一寸弱いね。
- 【平塚】 そうですね、土砂災害特別警戒区域に指定されているから土地が安くコストパフォーマンスが高かったというのが結局は最大のメリットだったかのように見えてしまいました。
- 【長坂】 空間としては、中から見たときにインテリアとして打ち放しは一応表現にはなっていましたけど、寒いんじゃないか？ しょう
- がなかったから擁壁を見せちゃった。活用はしているんだけどポジティブとまでは言いにくい。そんなに評価が高いとはならないし、身体感覚的には断熱を無視しているんじゃないかなとなる。もう少し次の話にしないか？ 駄目なんじゃないか？
- 【垣内】 擁壁を乗り越えていない感じがしますね、建築化されていない。そこをメインに解けていたら・・・断面を見たら他の同じような条件のところの住宅とそう変わらないんですよ、そのあたりがもう少し工夫があったら良いのに。
- 【平塚】 確かに、今後の擁壁建築を変えてくれそうな革命的な建築の力というところまでは感じられないですね。
- 【垣内】 プライエぐらいやってくれたら・・・あれこそ愉快な関係じゃないですか。住宅としては、なかなか良かったんですけどね。あれだけ単純なグリッドでやっているのに、そう単純に収まっていなくてところが上手いなと思う。スパイラル階段なんか余白ができていて単なる階段室じゃない収まりになっているって意外と良かった。
- 【平塚】 グリッドにならった遊びをつくりにくそう計画なのに、細かい余白を作っているのはすごい事ですね。しかもそこまで面積に余裕があるわけではないのに。
- 【長坂】 階段室で床の間みたい奥が収納になっっていたり、そういうところがいくつか用意されていて、そこそこ楽しくてきていますよね。そういう意味じゃ、玄関入って玄関ホールをギャラリーに使って、そこから3階にいくまでのいたるところが微妙につながっていくのだけれど・・・だからこそ、あれを山側に抜いておいてくれればねえ。
- 【垣内】 結局斜面に対して背を向けている事しかやっていない。
- 【長坂】 斜面のところを買っているのに、斜面に背を向けて、ややこっちの住宅地側に欠き込んでやっちゃてるから。無理矢理でもなんでもいいから向こうを見る話にしない・・・ちょっと惜しいな。



所在地／京都市右京区
用途／住宅
竣工／2016年1月
敷地面積／60.73㎡
建築面積／36.26㎡
延床面積／69.31㎡
構造規模／木造2階建て

【垣内】 「正しさ」は良い事なのかも知れないですけど、正しいことを正しいでしようと言わなくても、そうですねとしか言いようがない。あの場所であの家を建てるとするのは非常にマナーがよろしくて、好感は持てます。規範を示すという事において。

【平塚】 歴史的に京町家の原型を残すと言われる木曾の町家を工法的には参照しているとのことでした。一見素直に伝統工法を踏襲しているように見えて、実は京町家の歴史を裏返すような、ある意味乱暴な技術の導入をしているところが良いと思いました。

【垣内】 隣にああいう家が建っているのもハウスメーカーの家が建つよりは気分が良いだろうと思う。そういう意味では良いんですけど、設計者がやっている独自性みたいなものが実はあまり見えない。新しさが無いと言ってしまえばそれまでだけど、古い事に対する読み替えが・・・古いものがアップデートされて

いないのは惜しい。

【長坂】 古い物って良いですよと連呼しているけど、ビニルクロスもいいかなあと言っている人が振り向くような言い方をしないと・・・町に対する提案として、今まで興味無かった人たちが「伝統工法って良いのね」というふうにはならない。

【平塚】 京都にそんなに愛着は無いけれど、たまたま京都に代々住んでいらつしやる方が、たまたま丹波の木工さんたちに出会い、その方々が何故か木曾の文脈を持ってきて、結果的に京町家の備える本質的なよさのようなものにたどり着いている感じが面白い。

【垣内】 できあがっているものが、逸脱していないですよ。だってことで終わっている。良い家だと思えますよ。でも、「見た事がないな」とはならないじゃないですか。それは決定的に弱いと思う。

【長坂】 材料の気持ちの良さとか、そのもた

らす身体的な性能とかの提案が良いのは勿論わかるし、子供が傷つけても全然嫌に見えないという、あの感じはとても良いと思う。が、それだと昔は良かったというだけ。

唯一、外観で提案的に見えるのが、格子が物干しになっているところ。ただ、面白がるにはもう一発足りない。あと、トイレと洗濯室のあのあたりの形なんかも、もう少し何かあってもいいんじゃないか。もう一つずつ提案的に突っ込まないといけない。

【垣内】 やはり、良いと思っている事を違う言語で語れるって事は大事で、自分の信じてる言葉だけじゃなくて、こういう言い方ができるという事を見せてくれたら・・・それがプランとか建築に反映されていたらもつといい。本来の「みせの間」が子供部屋になっていた、天井高が抑えられていて。あそこがもうちょっと変に部屋っぽくなっていたら面白いなと思ったんですけど。

【長坂】 あそこ開口がね、割と大きめになってあった。あの外のところは単に駐車場になっていて、いきなり諦められたまちの景観が広がっていたけれど、中間部分に屋外のテラスでも何でもいから作って、あの三和土の部分をもうちよとやって、あの開口の前にもう少し内部の素材がはみ出していたら・・・予算がないから厳しいんですけど、あの素材感の世界が現代の町の中に広がっていくような提案があっても良かった。

【垣内】 言葉を飛び越えてくるものがあった方が今回のテーマである「愉快さ」につながってくる。物干し場とか格子の解釈とか。

【長坂】 愉快というのは他の人が見て愉快ということから。

【垣内】 そう思うと、愉快性がちよつと弱い。

【平塚】 でも工法をちゃんとわかっている職人さんが好き勝手暴れてそんな感じがする。

【長坂】 そういう愉快さはあったけれど、設計者としては職人さんのエネルギーが良い様に働くようにしなきゃいけない。その設計がもうちよつとあったら良かった。工法とか良くて、気持ち良くてきている。



所在地／京都市北区
用途／集会所
竣工／2019年4月
敷地面積／556.22㎡
建築面積／125.87㎡
延床面積／125.87㎡
構造規模／木造平屋建て

撮影／林口哲也

【垣内】あの敷地での配置は・・・あんなにコンテクストと関係なかったですね。
配置を90度ふることを考えた時点で、やる事が山ほど出てくるはずだが、それを放棄している気がする。あの形をやりたくて、あの大きさを。アウトラインが決まられていて、それをあのスパンで、あのトラスでね。もつとボリュームが倍もあるような体育館とかだとすごくよく分かる。でも、あの形をやりたくてやった結果、全部が縮こまって見える。無駄に気積があるというか、ただあの形をやりたかっただけだと思う。やっぱり公園に対して背を向けているというのが圧倒的に間違っている。

妻面にちよつと工夫があればね。完全に壁を落として向きを駐車場にだけしか向けてないから、あれエントランスの意味があるのかな？一回エントランス入って中ぐぐってホールに行かす意味がまったくわからない。

【平塚】確かに。

【垣内】いきなり玄関の軒下でいいじゃないですか、公民館なんて。雨のかららない軒の出だったら。それをわざわざエントランス作って、中間領域みたいなところから入る意味が果してあるのかな？

【平塚】正面が家形のシンボリックな建物ですが、一般的には地域の公民館としては求められない姿だと思う。しかし転入者が多い地域だから、実はシンボリックな形のほうが、覚えやすく集まりやすいとお施主さんはいへん喜ばれていました。5000人規模の地域の公民館にあれだけデザインオリエンテッドなものができて、しかも受け入れられてるということは、おそらくそうそうない現象で、良いなと思う。

【長坂】そういう意味では、あれは非常に分かりやすいシンボル。それでいうと、全然役に立ってないコンクリートのスロープ！何で奥まで行ってから登るんだ？そのまま行きゃあいだろあの高さだったら。だけど、あのおかげで、ちよつとオシャレに見えるわけですよ。うわあ凄い！新しくできたって、地元の人にとっては圧倒的にシンボルになっているので、そういう意味じゃ効いてますよね。

でもそのくらいは別に90度ふったってできるわけだし。

【平塚】シンボル性が弱まるからというのは、ふらない理由としては弱いですね。

【垣内】ただ、公民館にそんなにシンボルとかサイン性が必要とは思底思えない。サイン性しか残らないというのは、僕は建築としては決定的にまずいと思いますね。施主が喜んでるというのは、「ようやく我々のものが出来上がった」から喜んでるわけであって、あれが90度ふっても喜ばせられるはずじゃないですか。

【長坂】前のひどかった時と比べたら、それは喜ぶに決まっていますよ。喜び方の程度を議論すべき。もつと喜べたはずだっていう議論を今してるわけです。

もう少し設計者に対して優しい言い方をすると、例えばああいうトラスが必要ではなかったのかもしれないけど、やはり公民館としてのシンボル性っていうのは、ある程度あってもいいのでは？

【垣内】言い方を変えると、それって建築の自立性だと思っていて、それを語ってくればいいんですけど、そんな話はあまり出てこないし・・・。

【長坂】まあ、大きい空間をとるためにあの架構を採用していることの、レベルの高さは十分あると思いましたよ。

ひとつ、良いと思ったのは、靴置き場とキッチンまわりの抜け感。想像以上に良かった。サーバントスペースが3つある組合せが明確で非常にきれいにできていて、そういう意味での完成度は非常に高い。

【平塚】あれだけシンブルな構成だと、余剰空間みたいなものが生み出しにくいはずなのだけど、あの「間」があることで、すごくうまく裏と表が交互になる空間ができています。

【長坂】そういう意味では、バランス良くできてるなと思いました。

2020年 藤井厚二賞 講評(審査経過)

「まとめ」

【長坂】 一番皆が褒めてるのは、Yorinだな。都市空間、あるいは都市のありかたというのをどのくらい言うのか、別に新しくはないし、随分前からこういう流れははっきりしているけれど、それを宇治という具体的な場所で行った。ちよつと良かったのは、工場跡が入っていること。鉄骨造の工場も新しい中で変性し得るということも含めて、あんな路地みたいな所も、いろんなことやったら絶対何とかなりますよと語り掛けてくれるという意味では、一番この中では評価し易いかなと。

【垣内】 投げた石の波紋が、まわりにちゃんと見えている。

【長坂】 これじゃなかったらどれにする？

【垣内】 多分建築の、有る意味完成度から良くできてると思うのは深草の工房。けれど、一番負の部分の土砂災害つてところに背を向けているのは、愉快じゃない。

一方、中宇治では、全く関係ないところが、あのYorinを見て「いけるやん」と、それに応じて何か動き出してる様が愉快だなと思う。そうすると、やっぱりYorinが良いかなと思う。

深草の工房は、負の部分の愉快に変えていたら、他の人もまねできるし、そういうことが未来として波紋を感じ取れたのだけど、良い住宅として完結している弱さがある。

【長坂】 深草の工房も西院の家も建て主さんは、抜群に喜んでる。そういう意味では良くできている。

【垣内】 Yorinと比べたときに、住宅として良いんだけど、それからの先があるんか？と言われると・・・。

【長坂】 やり過ぎた今の時代に、とりあえず今あるものをどの程度いじりすぎないでやるかということが、リノベーションやコンバーションのテーマになっているんだから、控えめながらも的確にやっていくことをやらなきゃいけない。

【垣内】 大げさじゃないってことやね。オリジナリティがあるっていうのが良いなと思ってる。

【長坂】 街路空間に未来を与えるというか、歴史的なものがそこそこ残っている路地の未来を、あるハイレベルに実現しているということに尽きるのかな。

【垣内】 大きい開発的なことではなくて小さな所作が逆に周りを喚起させる、小さいが故に広がっていく、その間口の広げ方というのか、「こんな感じで良いんやったら、うちも」みたいな。アウトラインを引くんじゃなくて、小ささを積み重ねることによって、時間軸になるけれど、集積が町を変えていく。

【平塚】 スキームとしては結構大きかったりするじゃないですか。全国からテナント

募集をしているし、クライアントはまちづくり、未来を見越しているって考えている。大きい枠組みと小さいちよつとした調整が結構な振り幅で組み合わさって上手くまわっているのが良いですね。

【垣内】 他の3つはYorinに対抗するための建築の大きい考え方がちよつと弱い。

【長坂】 弱いと言うか、何か一番大きいところがちよつと気になる。

【長坂】 Yorinにあえて突っ込むと、結果としての現物のバランスは？窓からしか見えないところもありましたけれども。つまり、多くのDIYつて、こんなところまで塗っちゃって駄目だよねというのもあると思うけど、あれはそうじゃないと思うんですよ。なぜできたかというのは、説明もないし分からなかったけど、結果として、ある範囲に納めていたというのは、誰の功績かわからないけれど物としてはできていたじゃないですか。

【垣内】 その言いかたが面白い。自立性が弱いのがゆえに良くできていて、周りに波及するっていう。

【長坂】 強い自立性、弱い自立性というのは物理で言う強い力、弱い力みたいな事とは違うと思うんですが、強い自立性が過去に語っていた自立性というのであれば、今は弱い自立性が求められてきたし、弱い自立性の中にもグラデーション状に、これは

流星にまだまだ弱すぎてダメだねってところ、結構いけるねってところがあると思う。そういうのが、より見えてきたんじゃないかな。

【垣内】 Yorin自体っていうよりも波及したその先に愉快性が潜んでいる可能性が大いにありますよね。

【長坂】 だからそういう波及性があるということを示したという意味での評価です。

【垣内】 場所というか、やっている事が。そのものの自体の愉快性が強いとかじゃなくて、間口を広げることで色々な事をやりだした人の中にとんでもない愉快性をもった人があらわれるかも知れないというのが、そうした可能性がああ平等院界隈に現れると面白い。確かに。

【長坂】 ちよつと広げるだけで、何気ないところでちゃんとできる人って少ないんですよ。皆余計な事するんですよ、そういう事って分かりやすいようで、できない人はできない。

【平塚】 やつてそうに見えないから押し付けがましさがなく愉快に見えるというのはありますよね。

【垣内】 Yorinでいいと思う。多分その場所だけが愉快になってるんじゃないかって未来に愉快性を感じるようになってるところは確かにこの中では群を抜いていると思います。